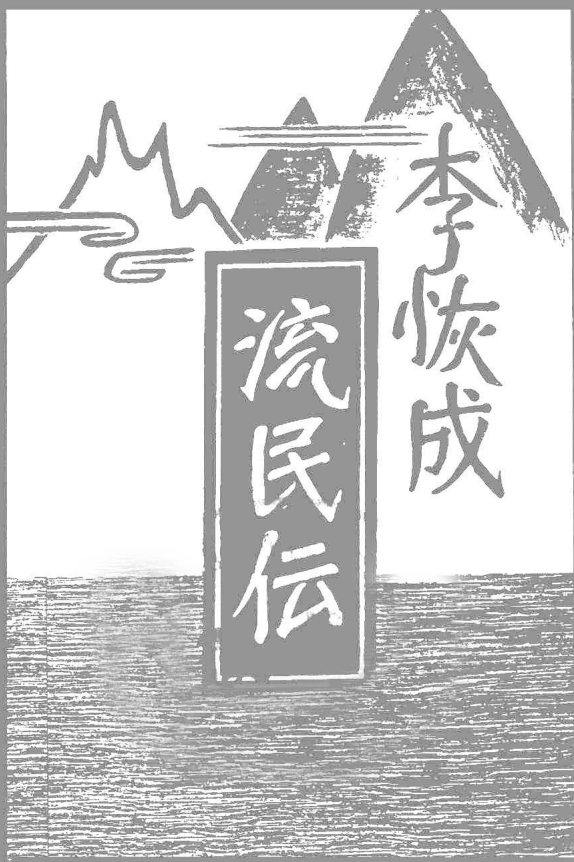


李恢成

流民伝

李恢成

流民伝



流民伝

昭和五十五年七月二十五日 初版印刷
昭和五十五年八月 五日 初版発行

著 者 李 恢成

発行者 清水 勝

発行所 株式会社河出書房新社

東京都渋谷区千駄ヶ谷二―三―二

電話四〇四―一二〇一（営業）

四〇四―八六一一（編集）

振替口座（東京）〇―一〇八〇二

印刷 三松堂印刷

製本 小高製本

©1980

定価はカバー・帯に表示してあります

目次

流民伝

哭

馬山まで

5

139

177

装帧

田村義也

流民伝

流民伝

民生が帰国したのは、共和国で第二の人生を送るためであった。だが、もうひとつ、三十歳になった民生の胸底には、別れて久しい樺太の母親や弟妹たちと北朝鮮の故郷で合流しようというねがいがあった。彼は十七歳のときにサハリン（樺太）を出、それ以来、親の消息を知らない。一九六一年の夏、八月だったか、平吉は従兄の民生から会いたいとの連絡をうけた。かれこれ一年ばかり、互いに往来もないままにすごしていた。こんなことは数年前には想像できぬことだった。当時は、週に何度か、顔を合わせていた。二人は同じく失業対策事業の仕事、俗にいうニコヨンの仕事をしていたので、どうしても現場で会う仕組になっていたのであった。

民生が指定した新宿の喫茶店は、歌舞伎町に近い、路地を入ったところにあった。クラシックを聴かせるところだが、前にこの場所で会ったことがあるのを民生は平吉に思い出させたのだ。

約束の時刻は四時だった。その五分ばかり前についた平吉は、いこいを一本喫って、何の用だろうかとぼんやりと考えていた。このところ、従兄にすっかり義理を欠いている自分を心疚しく思ったり、あれから恋人は出来たのだろうかと高円寺の泡盛屋の女性をちらっと頭に浮べたりした。十九歳で平吉が上京したばかりの頃、民生は従弟の平吉をつれて、なんだかのれんをくぐったことがあった。その飲屋は沖繩出身の夫婦者がやっていて、娘さんは黒目勝ちの眸といくらかえらの張った顔立ちをした美しい人だった。どうやら従兄は彼女を好いていたようだ。けれども彼女がはたしてどう思っていたのか、平吉にはよくわからなかった。とにかく、従兄は銚子のへりを指ではさんで照れたりしながらたのしそうに飲んでいたし、人好きのする顔立ちの娘さんはときばき働きながら常連の客に、まんべんなく微笑んでいた。

そこでの従兄は、信頼できる好青年とか朴訥な性格の持主という風にみられていた。それは従弟の平吉からみてもそうだと思えることなので、内心、悪い気はしなかった。平吉は、地方から東京に出てくるとき、当時やはり上京していた実兄よりも、四ツ年上の、この従兄を頼っていたのである。そして従兄が借りていた高円寺のアパートにころがりこみ、それ以来、一年ばかり世話になっていた。

民生は、喫茶店のドアをあけて入ってくると、すぐに平吉をみとめた。

「待ったか？」といいながら民生は坐りこみ、背広をぬいで、平吉をみつめた。

「いや」気さくに返事しながら、以前とちょっと様子が違うなと平吉は思った。

背広にネクタイまでしめている。革靴も、新調のものであった。それに何よりも、長年見慣れていた、あの懶げな表情が影をひそめていた。ニヨンをしていた時分、民生はどんなに仲間と興じている最中でも、どこかかばりを帯びていた。年じゅう、重たい影を曳いていた。現場での人物評は、かつて泡盛屋で平吉が耳にしたものと全くかわらぬものであったが、親戚という間柄で、いくらでも民生の憂鬱の原因に思いあたるフシのある平吉には、従兄のそんな様子がどこか自分でも哀しく思われるときがあった。

「凄いいじゃない。パリッと決ってる」

平吉は、親しみをこめて軽口をきいた。

「うん」

従兄は、平吉のおだてにのらず、意味のはっきりしない或る感情のこもった表情で、平吉を注意深く見ていた。

ずんぐりした指でコーヒークップをにぎり、一口すすると、民生は平吉の近況をたずねた。

「組織の仕事に精を出しているのか？」

「うん。自分なりにね」

平吉は率直に答えた。その年の春、平吉はいきなり総連中央の教育部に配置されたばかりであった。それは二十六歳の平吉に、民族的な仕事することへの自覚と誇りをもたらししていた。自分がどれほど任に耐え得るのかという不安や政治にうとい体質がどこかにひそんでいる自分に覚

束なさを感じていないといえは嘘になるが、いっぽうでは徹夜をつづけても疲労をおぼえぬような情熱をもっていた。

「そうか。それはいいことだよ」

「何もわからないでやってるかもしれんけどね」

「そんなことはないだろう」

「うん、まあ、学生たちと話合っているときは楽しいけれどね」

「おまえくらいなもんだからな。おれの兄弟や従弟のなかで、愛国事業に首を突っこんでやってるのは。いいことだよ」

民生は飾り気のない口調でつぶやくようにいった。殆ど表情をかえないで話す癖のある従兄だが、内心で自分の傷ついた過去をふりかえっているような気配がそこはかとなく伝わってきた。

平吉は、自分のことをそのように認めてくれる従兄がうれしかったものの、兄弟や従兄たちが辿ってきた道を思うと複雑な気分になせられた。

「結婚は、いつ、するんだ？」

話題が切りかわったので、平吉は「さあ……」と口ごもった。いちど、交際している女子大生をつれて、高円寺のアパートの民生を訪れたことがあった。一年とちょっと前のことだ。高円寺駅の北口の商店街をずっと奥の方に入っていくにつれ、なつかしさが胸をしめつけてきた。巢なんだ、巢。鳥のねぐらさ。南京虫に好かれてよ。あいつは天井から上手くパタッと体の上に落ち

てくるんだ。平吉は彼女にむかってしきりにそのアパートの部屋の特徴を説明しながら歩いていった。思えば十九歳になったばかりに家出同様にして上京し、もぐり込んだその四畳半の部屋は、男所帯のひどく汚ないところだった。でも、そこでくらしていた二年ばかりの日に体験したことどもは平吉にとってひどく新鮮なことがおかつた。そのアパートから平吉が出たあとも、民生はずっと住んでいた。平吉が民生に引き合わせに女子大生をつれていったのは、自分が兄弟や従兄のなかでいちばん人間的に好きな年上の彼をぜひ紹介したかったからだ。

「たぶん今年じゅうに思っているけど……」

平吉はあいまいに言い直した。泡盛屋の娘さんとうまういかなかったらしい従兄の前でいい気になるのは気が引けたからで、

「小母貴は元氣ですか？」と話題をそらすようにたずねた。

「うん」民生はこくりとしたが、それ以上の説明はしなかった。

小母貴、と民生がつねに親愛をこめてよんでいた、細面で五十を出たくらいの藤木という姓の未亡人は、平吉のみるかぎり、ニコヨン仲間たちから母のように慕われていた。なんでも息子さんは東大出のチェリストでNHK交響楽団の一員とかであったが、彼女は妻帯している息子とは別居して、南町で独りぐらしをしていた。そこらは戦災の焼跡にできた家屋がおおく、その家も二間だけの小さなものであった。彼女が失対の組合役員をしていることから、その家はしばしばニコヨン仲間が訪れ、体のいい溜り場になっていた。平吉も民生につれられてなんとかその家に

あがった。そこでは快活な笑いと気持のいい諷刺や、ちょっとそこらにはない親身な話し合いがあつて、傍目にも心地よかった。民生は時折、淳朴な青年の典型みたいに扱われて話題にのぼつた。

「なにせ上野駅から高円寺までリンタクで来ようって人なんだから……」

そう誰かが冷かしにかかっただけで、みんなはどつと笑うといったぐあいだった。一九四九年の暮に民生は東京に出てきた。上野駅を降りた十八歳の民生は、高円寺までどのくらい距離があるのかよくつかめず、えいとばかりに自転車のうしろに幌をつけた簡易タクシーにのつた。リンタクの老人は途中までペダルを踏んできて音をあげた。どうかここで勘弁してくれといったと、いうのを当の民生の失敗談としてきいて知っているニコヨン仲間がカストリを呑みながら酒の肴にして囃すのだ。さすがに平吉もこれにはわらつた。けれども、平吉にしても、上京したときは従兄と似たり寄つたりの体験をしている。常磐線を急行列車は走りつづけ、もうすぐ上野駅に到着するはずであつた。高円寺の馬橋四丁目。そこに民生たちが根城にしているアパートがある。平吉はこころの中でそう念じながらぼんやり車窓の外を見ていた。すると急行列車がいましも小さな駅を通過しようとしているのだった。アッ。平吉は、自分の目を疑つた。馬橋駅を過ぎていく。あわてた平吉はピヨンと座席から立ちあがり、おもわず網棚の荷物に手をかけようとした。それから、ふと自分のおかしさに気づいて、臆病そうにそつと座席に腰をおろした。列車は馬橋駅からもう松戸駅を過ぎ、千葉県と東京の境をなしている江戸川の鉄橋に差しかかつている……

思ひ出すと滑稽なこんな失敗譚も、平吉たち従弟に共通したどこか抜けた一面をしめしているものにちがひなかった。とはいへ、戦後まで、チンチン電車も見ることがないまま樺太でそだった田舎者の平吉たちの感覚をそれは物語ってもいるのだった。

当時はこぎれいな東京弁に奇妙に腋をくすぐられるような気がした平吉だった。近所の店にいて、「ください」と声をかけるのに、どうしても抵抗を感じた。平吉が未成年期の一時期をすごした札幌では、「ごめんなさい」という挨拶から入るのが普通であった。それなのに、いきなり「ください」というのは、あまりストレートすぎていて、それに何となく買ひ手が一段低い卑しい立場に立たされるような不当な感覚がくるのだった。民生とてもこれに類した体験をいっぱい持っているであろう。

上京した民生はたちまち戦後のあのきびしい生活に追いこまれ、混乱した政治状況のなかで、急速に革命運動の真只中に身を投じていった。朝鮮戦争からメーデー事件とつづく歳月、民生はかなり過激な運動をやった。その頃に知り合った民生の仲間たちはその後、或る者は失意に沈み、或る者は自分を立て直してあらたな平和運動へと入っていった。小母貴は、その後者に属する女性であろうか。彼女は、仕事場では緋のもんべをつけていたが、家では質素ながら品のいい着物にかえていた。家の軒下には小さな花床もつくっていた。どの年だったか正月も中旬を過ぎた頃、民生にくっついて寄り合いにいくと、彼女は日干にしておいた餅のかびをこそげ落しながら、みんなの話にくわわっていた。青かびはけっして体の毒じゃないの、ペニシリンの素になるくらい

なのよといいながらみんなにおしることを振舞ったが、そんな言い方には教養も仄見えていて、けっして高ぶらない、静かな物腰が印象的であった。樺太を出てきてからこの方、実母とわかれたきりの民生にとって、彼女の存在は、こころの安らぎになっている気配があった。

平吉のなつかしさをこめた問いに答えなかった民生は、何かにこころを奪われているようであった。

「ところでな……」と民生が小さな目をまじまじとこちらにむけて、ぶ厚い唇をきゅっとむすんだ。

「いろいろと考えたんだが、こんど帰国することにきめた。共和国にいかうと思う」
「共和国に」

平吉は、思いがけぬその一言に引きつけられ、従兄の顔を見つめた。

「うん」民生はほとんど無表情にうなずいた。

「これ以上、日本にいても時間の浪費だしな。それに、元も子もなくなっちゃう。ツケが溜るだけだよ」

ぶっきらぼうにいうと、民生はコーヒーの残りをあけた。

「そのことをおまえに伝えようと思って来てもらったんだ」

「そういうことだったわけ」

平吉はある感慨に打たれてつぶやいた。それから顔をあげて、従兄にたずねかけた。